

女性のための情報誌

NETWORK

NO. 18

目次

特集 今・夫婦で生きる	2
◇夫婦の関係を見つめ直して みませんか	4
ウーマンスクランブル	8
婦人課事業紹介	10
グループ紹介	12
国際交流のひろば	13
ねっとわあくらいぶらりい	14
ポップリ	15
あとがき	16



静岡県

今・夫婦で生きる

夫と妻の新しい関係 ♥♥♥



「であるためには、その前にまず、「男を変える」という作業を経なければならぬ。では、男はそんなに簡単に変わるかといえば、これがなかなかやっかいだ（男の私と言うのだから、確かである）。妻がひんばんに外出を繰り返すようだと、「たまには家にいたってバチがあたるまい」などと露骨にいやな顔をする、会社から戻ればいつでも夕食の支度が待っていると考えている——。大方の夫たちが、こんな考え方の持ち主なことはないか。私だって偉そうなこと

は言えない。我が家は共働きなので、妻の外出にいやな顔をすることはないが、家に帰れば温かい夕食が待っているのを期待するクチではある。

妻の方も、「うちのパパに、いまさら食事の支度なんかさせるの悪いし……」と、案外夫に対しては寛容な人が少なくない。自分の夫は旧態依然でいいと考え、他人の夫に対し、つまり一般論で「男が変わる」ことを望む女性もいるようだ。

ただ、こうした寛容派も、今後は少なくなっていく可能性がある。夫に対し、家庭内での分担を求める妻が、さらに増えるに違いない。妻たちの夫に対するシユプレヒコールは、経済支援（金銭保障）だけではなく汗を流せ（家事参加）という、中東の湾岸戦争での、日本に対する国際世論にも似ている。夫にかぎらず、これからの男性は大変だ。女性陣からのさまざまな要求をクリアしなければならぬのだから。夫と妻の新しいパートナーシップも、この試練を克服しないかぎり、成立しない。

筆者プロフィール

鹿鳴 敬

1945年生まれ

1969年 千葉大学文理学部卒業

同年 日本経済新聞社入社
婦人家庭部記者として、主に婦人問題、婦人労働問題を担当。

現在 婦人家庭部次長

主な著書

「男と女 変わる力学」(岩波新書)

「ウーマン・フロンティア」(日本経済新聞社)など。

女性が変わり始め
男性が慌てふためいているという

素敵な夫婦とは ♥♥♥

日本経済新聞の婦人家庭欄では今年の正月企画で、「男と女の構造協議」というテーマの連載をした。もちろん、日米間の構造協議に名を借りたもの。ご承知のように日米間にはさまざまな経済摩擦が生じているが、同様に男と女の間にも摩擦が生じているというのが、連載にあたっての認識だった。経済摩擦は徐々に解消の方向に向かうが、男女摩擦だけは長くくすぶり続けるのではないかと予測する専門家もいるほどである。

なぜ摩擦が起きているのかといえば、男女間に家庭観や夫婦観、さらには仕事観などのギャップが出始めているからだ。例えば多くの夫たちは、妻に対し家庭をしっかりと守る、子供を育てる、近隣との付き合いをこなすといった「銃後の守り」を期待している。確か

に今までは妻側も、そうした役割を天職だと思って黙々とこなしてきた。

夫の方も、会社でしっかり働き、家族のために経済保障を行えば、後ろ指をさされることはなかった。男の甲斐性とは、お金を稼ぐこと、といっても過言ではなかったが、ここに来てその常識が通用しなくなっている。

高学歴女性が増えた、仕事を持つようになった、などさまざまな理由が考えられるが、ひとことでいえば女性の意識変化が進んでいるからだろう。彼女らは家事・育児など、いわゆる「内回り」のことをすべて押しつけられることにアレルギー反応を示し始めているのである。

「それに比べると昔の女性はしっかりしていた」と、良妻賢母時代を回顧するのは、ないものねだりにひとしい。もちろん現代の妻たちだって、よき妻、よき母でありたいと思っっているはず。と同時に、よき社会人でありたいとも思うようになってきている点に夫たちは気付くべきである。

言葉を替えれば、女性たちは、妻役割、母役割だけに人生を燃焼することを潔しとしなくなった。「女役割」をも堪能したいと考え

るようになった。この変化は、子供の数の減少、あるいは長寿化などとも微妙に結びついている。

人生五、六十年時代の女性たちはたくさん産んだ子供の世話に追われて天寿を全うした。

しかし人生八十年時代といわれる現代は様子が違う。子供の数はせいぜい一人か、二人。三十半ばを過ぎれば子供の手が離れ、その後には単純に計算しても四十年以上の長い人生が待っている。その間、家の中でジツとしていることを望む方がおかしい。ある人は職場に、ある人は市民運動にと、妻でも母でもない、一人の女性としての生きがいを求め、はばたいていく。

さらに彼女らは「国連・婦人の十年」を契機に、家庭や職場への男女共同参加という考え方の洗礼をたっぷり受けてきた。伝統的な性別役割分業の解体は、フェミニズム運動の最大の課題である。

さて、話を前に戻そう。冒頭に、いま男女摩擦を生じていると書いたのは、男性が女性のこうした意識や行動の変化に気付いていないためだ。男が鈍感であるかぎり、夫婦間でよきパートナーシップを結ぼうと思っても不可能である。逆にいえば、夫婦がよきパートナ

特別寄稿

男と女の間には…

くすぶる「火種」

日本経済新聞社婦人家庭部次長

鹿鳴 敬

夫婦の関係を

見つめ直してみませんか

相手に対する思いやりと理解と尊敬が
あつてこそ夫婦は成り立ちます

結婚こそが女の幸せのすべてだという時代がありました。けれど現在、女性の生き方は変わりつつあります。価値観の変化、ライフスタイルの変化は女性たちに結婚観の変化をもたらしました。結婚形態の多様化とともに夫婦の形も様々になっています。

高齢化社会を迎え、二人で生きる時間が長くなっています。これからの時代、家族形態の変化によって、世代間の連帯が縦のつながりよりも重要になるのかもしれない。今までのような「主従の関係」ではなく、対等なパートナーシップのつきあいが必要なのではないでしょうか。夫婦が一緒に暮らす以上、夫婦であることを楽しまなければなりません。ひとりよりふたり、ふたりで楽しければ最高です。お互いにプラスになる関係でいたいものです。

そのためには、個人個人が人間として精神的に自立することが大切です。どちらかが無理をして、

片方だけが好きなことをしているのではなく、お互いが普通の生活をしながら認め合い高め合っているから素敵だと思います。

夫婦はもともと他人同士。まずはコミュニケーション。心が通うためにも愛情を示すためにも、コミュニケーションは必要です。

年をとって時間ができてからではなく、若い時から意識的に話し合う努力が大切です。お互いをわかりあえるというのは、決して相手の意見に賛成することだけではなく、考え方が違っていても当然だと理解することではないでしょうか。相手に対する思いやりと理解と尊敬があつてこそ夫婦は成り立ちます。共に成長するために必要なエネルギーや安らぎを、与え合える関係であつたらと思います。

そこで、お互いに理解し合い尊重し合つて暮らしている素敵な夫婦を紹介します。



清水町

杉山博一さん

杉山由紀さん

彼は、とにかくやってみれば、と

必ず言ってくれるんです

柿田川の湧水で有名な清水町の一角に、通りに面してバラの温室が広がっています。作業場に入るとあふれんばかりのバラに囲まれ杉山博一さん（35）が「ようこそ」と笑顔で迎えてくれました。博一さんは彼が始めたバラ園の経営者。結婚して八年。彼はバラの栽培、由紀さん（33）は販売を担当する文字どおりの二人三脚夫婦です。「いや、二人十脚かなあ。とにかく由紀はパワーがあるから。」二人の出会いには第14回静岡県「青年の船」。中国への研修の旅の途中でした。農大で応援団長をしていた博一さんも驚くぐらい「すごい元氣なやつがいるなあ」というのが由紀さんに対する第一印象。一方由紀さんは「これからの農業はアイデアだ。生産から販売までセンスが勝負」と熱っぽく語る博一さんに強く引かれていきました。学生時代から培ってきた販売センスを生かして、自分らしく、明るく前向きに生きていこうと考えていた由紀さんは「大っきくて頼もし



新婚旅行の
インドネシアバリ島で

い」博一さんとの結婚を決意し、出会いから半年後に結婚しました。バイタリテイあふれる由紀さんは、生花市場に通い、セリ仲買人の資格をはじめ、フラワーデザイナー講師や古流生け花教授の免状も取得。博一さんが心をこめてつくるバラを生かすことが一生の仕事だと、日々飛び回る忙しきです。「彼は細かいことを言わずに、とにかくやってみれば」と必ず言うてくれるんです」と由紀さん。「もちろんしょっちゅうケンカはします。お互い何でも言いあっているので、将来の夢にしても僕が夢を語っていると彼女は現実的な考え

を持ち出すという具合。でも考えが違うということは自分自身の足りないところを補ってくれることなんですよね。お互いの個性を認めあってフリーにしておいた方がいい結果につながるんだと思う。海外旅行も年一、二回出かけるこのことですが、驚いたことに「別々に行くんです」「二人で一緒に行ったのは新婚旅行だけ」と博一さんと。お互いの自由を尊重し、感動と感性を大事にした、お二人の前向きな姿勢が伝わってきます。

「いつも感動できて、何事にも挑戦できる女性でいたい」という由紀さんに「僕はワクを決めない、つぐらな、常にボーダレスな人間でいたいな。そしていつも広い意味での勉強をしなければいけないと思う」と博一さん。

仕事も生活も多忙をきわめる御夫婦には、七歳と五歳のお子さんがいます。子育てについても「粗放栽培、産みっぱなしは言いすぎかな。ガツガツせずにとにかく自由にさせてます。自由な発想がなくなるから」と、実におおらかです。「生活も仕事も両方楽しみたい」。博一さんの言葉に微笑む由紀さん。バラにかける情熱で、二人のきずなはしっかりと結ばれています。